

ディアスポラ・アイデンティティの パフォーマンスとして読む『炬火』

Werner Welzig (Hrsg.): Wörterbuch der Redensarten zu der von Karl Kraus 1899 bis 1936 herausgegebenen Zeitschrift »Die Fackel«. Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, Wien 1999.

河野英二

創意と実験精神に貫かれた「辞典」である。最初に注目に値するのは、その装幀だ。A4変形版で8cm近くの厚みがあり、ずっしりと重い。白地の中心に赤い長方形の図を配した表紙には、短縮形の標題だけが簡素に掲げられている。厚手の紙に印刷された総計1000ページ強の本文から任意の箇所を開くと、各ページは幅10センチ半の中央部が白ないし薄いベージュ色、それを左右から挟む幅5センチ半の太枠が濃いベージュ色という構成で三分割され、そこに黒と赤の活字が様々な字体とサイズで配列されているのが見える。ロサンジェルス在住のアン・バーディック¹⁾がグラフィック・デザインを担当したこの書物は、手に取る者の目を愉しませ、充実した物質感を印象づけずにはいないだろう。事実この『辞典』は、2000年度の「最も美しい本」を選ぶオーストリア書籍商連盟のコンテストで1位を獲得したほか、パリとニューヨークでも同種の賞を受賞しているのだが、それは決して内容と無関係な挿話ではないのである。

その出版はウィーンの諷刺家カール・クラウスが執筆し、自ら発行した個人雑誌『炬火』の創刊百周年に合わせて企画された。表紙の赤い長方形は、『炬火』各号の外観をシンボライズしているのである。編者ヴェルナー・ヴェルツィヒの説明によると、これは全3巻をなす『炬火』辞典のなかの独立した1巻であり、5年ごとの間隔をおいて発行される続刊として『毒舌・罵倒語辞典』と『イデオロギー辞典』が予定されている²⁾。全体の構想が明らかになるのはそれらが出揃ったときだが、この『慣用句辞典』に焦点を当てることによって、その土台となった出版計画の独自性とクラウス研究における意義を推し量ること

1) プロフィールはウェブサイトを参照 (www.burdickoffices.com)。彼女はカリフォルニア芸術大学等でグラフィック・デザインとニューメディアについて講義しているほか、自らサイト・デザインを担当するウェブ・ページ「電子書評 (ebr)」で「イメージとナラティブ」部門を編集している (www.altx.com/ebr/ebr6/ebr6.htm および同 [ebr7/ebr7.htm](http://www.altx.com/ebr/ebr7/ebr7.htm))。彼女の基本思想は、J. D. ボルター『ライティング スペース』(黒崎政男氏らによる邦訳は産業図書 1994年刊)への書評が簡明に伝えている (www.altx.com/ebr/reviews/rev4/burdick.htm)。

2) Vgl. Welzig, Werner: »Wörterbuch der Fackel«. In: Jahrbuch der Schiller-Gesellschaft, Bd. 40 (1996), S. 505ff. および ÖAW のウェブサイト (www.oew.ac.at/litgeb/wbdf.html)。

ができるだろう。まず標題が示しているように、この『辞典』の出典は『炬火』であり、そのなかには1994年に完結したクリスティアン・ヴァーゲンクネヒト編のズーアカンプ版『カール・クラウス著作集』には収められておらず、『炬火』のリプリント版などを通じて読むしかなかったクラウスの文章も多く収められている。この『辞典』は、『著作集』を補完する資料として位置づけられるのだ。次に具体的な内容としては、データベース化された『炬火』のテキストから、そこで用いられている「慣用句」が9000個以上選ばれて「慣用句インデックス」にまとめられ、その中からさらに144個の「基本形式」が見出し語句として挙げられているのだが、『辞典』の本文ではそれらの意味が解説されているわけでも、実益のために用例が列挙されているわけでもない。そもそもここで「慣用句」としてひと括りにされている対象自体が、編者も述べているとおり慣用語法研究の立場から厳密に定義されているわけではなく、ドイツ語圏内外の格言やことわざ、名句や流行語、クラウス自身が好んだ特徴的な言い回し等を包括的に含んでいる。しかも編者は、それらが統計的に何らかの集合を「代表」するものではないと断つてもいるのである。類書として言及されているのは、ギリシア・ローマの古典を抜粋して作者名入りで収集したエラスムスの『格言集』だが、この『炬火辞典』は人文主義的な教養の涵養とも直接には明らかに関係がない。これは「テキスト辞典」として、つまりはアンソロジー的な読本として読むための書物なのであり、その文面は定義ではなく、編者のいうところでは常に新しい「解釈」に向かって開かれているのだ。922号まで発行された『炬火』が含んでいる膨大なテキストは、特に私たちのような外国人読者にとって閲読の契機を得ることが容易でなかったといえるが、今や「慣用句」という観点から通時的な抜粋と再編集が施され、それを読み比べることができるようになったのである。上述したグラフィック・デザインが、この型破りな『辞典』を使いこなすための機能をも兼ねていることはいうまでもない。それでは、これを読む行為は、実際にどのような体験をもたらすのだろうか。

144個の見出し語句はひとつのキーワードによってアルファベット順に配列されているが、ここでは„Farbe“をキーワードとするFarbe bekennenという慣用句を取り上げてみよう。冒頭箇所、「背骨」を意味する英語の名詞によって『炬火』スパイン」と名づけられたページの中央部分に、センチュリーオールド字体で印刷されているのが、ここで「動機づけの典拠」(それは常に赤色によって他から区別される)となった文章である。「資料コラム」と呼ばれる左の太枠部分にサンセリフ字体で挙げられた出典によって、それが『炬火』第216号からの抜粋であることが分かる。これは編者が「とりわけ挑発的」と感じ、この慣用句を採録する動機を得た使用例を含むとされる箇所だ。この例では売春業を財政上の必要性から管理している「国家というならず者」が、「旗幟を鮮明にしたことなどいつあったか」という皮肉な問いかけが要点になっている。これに続く「スパイン」に出典なしで列挙され、諷刺家クラウスに対する読者の期待に込めているのは、この慣用句が彼によってどう言葉遊び的に「変形」されたかを示す主な例である。その左下では、ドゥーデンを初めとする一般の辞典でこの慣用句に与えられている意味の説明が短く参照され、その右下では「解釈コラム」と呼ばれる太枠のなかに、この慣用句を採録した理由や、『炬

火』におけるその使用例などを概説するクレーセリフ字体の「クシヒテルル」（「小エピソード」を意味するオーストリア方言）が現れる。それと並行して、次に、この慣用句が『炬火』において用いられた38個の短い文例が年代順の出典つきで列挙されたあと、その中から選ばれた9個が再び、今度は4つの「グループ見出し」によって分類され、前後の文章も含む拡張された形で引用される。引用には、『炬火』の本文を「タイポグラフィ的な翻訳」の作業に付し、辞典全体に共通するセンチュリーオールド字体に移し替えて転載した「『炬火』テキスト」と、『炬火』の本文をそのままスキャンし、ページの色がけなしの白地（ページ地は『炬火』本文からの乖離を、その濃淡は乖離の度合いを示すという意味を付与されている）の上に原寸大で再現した「『炬火』イメージ」というふたつの種類がある。この辞典の対照的な特徴である版型の大きさと見出し語句の少なさは、このユニークな引用方法からの帰結だといえよう。それによって読者は、慣習的に「同じ組のカードを出す」または「旗幟を鮮明にする」という比喩的な転義で通用しているこの句が、あるときは文脈上の布置によって、あるときは様々な言葉遊びの手法によって諷刺の効果を生み出す具体的な事例を、『炬火』の原典を読むのに近い感覚で概観することができるのだ。ここでは、そのような転義と「色を打ち明ける」という原義が故意に混在させられているふたつの例の翻訳を試みてみたい。

さもなければ当時、既に色は死に絶えていたところだろう。なぜなら雄弁家が色を打ち明けただけでなく、書き手が色を描写していただろうから。（『炬火』第363号より）

しかしそれについて私は何も知らないし、幸いなことに自分の人種について旗幟を鮮明にするよう求められただけで、自分の人種の色を打ち明けるよう求められたわけではなかったのだ。（『炬火』第386号より）

前者はジャーナリズム批判を主題とする「『炬火』テキスト」、後者はユダヤ人問題を主題とする「『炬火』イメージ」からの抜き書きである。後者ではクラウスの文章だけでなく彼がコメントしている雑誌記事も、引用のなかの引用として掲載当時のままの形で読むことができる。さらに各引用文の左に置かれた「資料コラム」では、読者がそれらと関連する他の様々な慣用句を見出し語句や「インデックス」から参照することができるよう、「ハイパーテキスト的」な指示がなされているのである。

このような視覚上の配慮を伴う編集が、見出し語句の選択とそれを引用する仕方、および引用範囲などの点で慎重な議論を積み重ねた結果であり、そこにこそ当該辞典の眼目があることを編者は強調している。確かにそれは、著作集や『炬火』の原典によるだけでは必ずしも得られないクラウス「解釈」の可能性を拓いているといえよう。そこから、文学研究上の様々な主題への契機を得ることができる。何よりもそれは、クラウスにおける言葉遊びの主題と形態、さらにその機知やユーモアとの関係を探るための貴重な材料を提供するだろう。また、そのような言葉遊びにおける言語の指示機能を考察することは、明白

な「虚構性」や「オリジナリティ」に立脚しているのではないようにみえる彼の散文テキストの文学性をどこに求め得るか、という問題に直結している。しかしまたそれを通じて、例えばバフチンがドストエフスキーの小説やカーニヴァル現象とともに論じたメニッポス的な諷刺という主題を考察対象に含めることもできるはずである。上の例でみたようにクラウスの言葉遊びは、本来その名称からして話し言葉に属する「慣用句 (Redensart)」の語義を、テキスト内部では決定不可能な差延的戯れに導く書字の技法に明らかに立脚している。即ちこの辞典は、遊びと美的享受に関わる解釈学的な主題と並んで、「間テキスト性」ないし「発話のコンテキスト」や「ディスクール」のようなポスト構造主義の主題、さらにまた後述するような問題群の考察へと促すだけの射程を内包しているのだ。そこから連想されるのはフローベールの『紋切型辞典』やピアスの『悪魔の辞典』だが、この『炬火』辞典』はそれらとも大きく異なる種類の書物なのである。それらが辞典の形式を借りて、流行語的な常套句およびそれが体現する思考習慣を諷刺したアフォリズムや警句の集成だとすれば、そのような試みの対応物はクラウスのアフォリズムにもみられる。ところがこの『辞典』の編者たちは、日常言語に融解した定型表現である「慣用句」を単なる「常套句」からは原則的に区別し、それをクラウスがメタ次元から論評するのではなく、各種の操作を加えながら実際に使用しているテキストを抜粋しているのである。その際にグラフィック・イメージは、『炬火』原典でも既に決定的な重要性をもっていた。なぜなら編者たちが注意を促しているように、クラウスは彼専属の印刷業者ゲオルク・ヤホダとの緊密な共同作業を通じて、例えばロマン字体の意図的な使用によってフラクトゥーアの全盛に異議を申し立て、また字間を調整することによって引用句の与える印象を操作したり、ページを分割して二つの引用句をモンタージュ的に対照させたりする技法を駆使したからである。のみならず彼の諷刺そのものが、話し言葉のなかで自動化した思考習慣を文字の物質性によって頓挫させ、言語の他者性の自覚を伴った批判的な思考の創造へと促す「書かれた演劇芸術」として構想されていたのに他ならない。読者の視覚への訴えは、『炬火』での写真や図版の掲載、朗読会でのクラウス自身の可視化やスライド写真の映画的な使用にもみられた。この辞典では、特に『炬火』イメージでそのような文字とイメージの融合によるメディア・ミックス的な戦略も再現されており、そこで読者は書き手クラウスの身体性が幽かな痕跡を描いているのに会うのである。

文学研究においてテキストのデザインがあまりにも軽視されていることを指摘し、それとの対比でクラウスにおける「イメージとしてのテキスト」や「タイポグラフィックな演技」に言及している編者たちは、そのような問題に対して十分に自覚的だ。これが続刊においても継承される観点ならば、ようやく私たちはクラウスの諷刺に関して、それがもつ独特な視覚芸術としての側面をも評価するという適切な了解を共有することになるだろう。しかし私は、リテラルなものに限られない視覚性（および朗読会におけるオラリティ）を不可欠の構成要素とする彼の諷刺が、視点を変えれば「パフォーマンス」の問題圏とも交差しているといえることを指摘しておきたい。それはまさに、編者のいうように彼のテキストを全面的に特徴づけている慣用句の使用において明らかになるようにみえるにもかかわ

らず、編者によっては触れられていない点なのである。即ち慣用句とは、慣習化して儀礼的な意味をもつに至った表現であり、その限りで J. L. オースティンがその言語行為論のなかで「行為遂行的(パフォーマティブ)な動詞」の一覧表という形で例示しようとした、言語の「発話内的な力」を前景化させているといえる³⁾。それは表現が指示する「意味」とは異なり、表現が発話されると同時に行使される再帰的な、指示という迂回路を経ることのない「力」だ。言語がもつこの次元を主題化したことによって言語行為論は、戯曲に内包された作品の「意味」を再現=表象するという考え方に立脚した近代劇へのアンチテーゼとして徐々に確立された「パフォーマンス」芸術との接点をもつことになる。このことを論じているのはジュディス・バトラーやステュアート・ホールなどだが、そのような論者たちの動機がジェンダーと人種のアイデンティティにおける本質主義への批判にあることは周知のとおりである⁴⁾。つまりここでは「男」と「女」、「ヨーロッパ人」と「非ヨーロッパ人」といった二分法的なカテゴリーが実体的な根拠をもつものではなく、反復的な言語慣習によって事後的に獲得される「役割」にすぎないと看破され、その言語慣習を戦略的に模倣あるいは改変することで二分法を相対化しようとする内在的な差別批判の行為として、「パフォーマンス」が再定義される。そのような観点からこの辞典を見直すとき、ドイツ語の慣用句に対するクラウスのアプローチもまた、それがもつ「発話内的な力」を差別批判へと方向づけ、慣習に依拠しつつ慣習を打破しようとする両義的な傾向をもっていることが理解されるのである。事実、先述した >Farbe bekennen< の例でみられたとおり、売春のようなセクシュアリティに関する差異、そして特にユダヤ人差別という人種上の差異の問題を主題とし、そこで劣位項とされる側に加えられる抑圧と排除を批判する例文が集められた見出し語句は、明示的な事例だけでも半数近くにおよぶ。最も顕著な例は「大血に根ざした」(bluboständig) という造語によってナチズムが嘲笑される例文を含む >Blut und Boden< (血と大地) や、>Deutschland erwache, Juda verrecke< (ドイツは目覚めよ、ユダヤ人はくたばれ) のような見出し語句だが、>die Rechnung ohne den Wirt machen< (見込み違いをする) のような一般性をもった慣用句からも、それを構成する „Wirt“ という名詞を「ホスト社会」の成員と捉え、彼との関係で「寄生者」としてのユダヤ人が「見込み違いをした」と自嘲的に述べるような類いの言葉遊びが早くから頻繁に創造されており、この主題は明らかにクラウスの諷刺テクストを貫く中心軸となっているのである。

反ユダヤ主義の状況下で徐々にマイノリティへと追い詰められて行った当事者の立場からの、ドイツ語の言語慣習に対する戦略的かつ遊動的な関与。およびそこから生じた成果の「演劇的」な視覚化。これらがクラウスの諷刺を、全体として先駆的な「パフォーマンス

3) Vgl. Burger, Harald u.a.: Handbuch der Phraseologie. Berlin-New York 1982, S. 7ff.; 110ff.

4) Vgl. ジュディス・バトラー (竹村和子抄訳): 触発する言葉—パフォーマティビティの政治性—[『思想』第 892 号, 1998 年] 8 頁以下およびステュアート・ホール (宇波彰訳): 誰がアイデンティティを必要とするのか? [S・ホール/P.d. ゲイ編『カルチュラル・アイデンティティの諸問題 誰がアイデンティティを必要とするのか?』大村書店 2001 年] 28 頁以下。

ス」の行為と捉えるための有力な根拠となる。もちろんそこでは、>die Sprache beherrschend<という見出し語句の豊富な文例が示すとおり、ドイツ語という「言語をマスターすることの不可能性を、「言葉に仕える者」として実演し続ける文学的な試みが中心にあった。しかしこの自己規定において、ユダヤ的な思想伝統に対する自覚が控え目に表明されていることも見落とされてはならない。彼は芸文欄におけるテオドーア・ヘルツルの後継者として出発しながらも、同化主義を理想として固守し、ディアスポラ状況を解消しようとするシオニズムの運動には与しなかったことで知られる。とはいえ言語思想という内的次元に強く刻印されているように、ユダヤ民族の文化的な「起源」に向かっては、それが純粋な形態においてあるというドグマを排しつつ、想像的に回帰することを拒むことはなかったのだ。このような態度は、現在カルチュラル・スタディーズやポストモダン人類学において、世界各地で異種混血的な対抗文化を实践するアジア・アフリカ・ヒスパニック系住民たちの「ディアスポラ・アイデンティティ」として論じられている主題との比較で考察できるものに他ならない。私はこの辞典を読みこなすためのひとつの概念的な補助ツールとして、まさにクラウスがこのようなアイデンティティのあり方を比喩ではなく文字通りに生き、そのような立場からドイツ語圏に民族共生を許容するだけの文化変容を引き起こすべく、様々な戦略を駆使したとみなす可能性を提案したいと思う。『炬火』や朗読会を通じた自主メディアの実験という、ジャーナリズム批判と表裏一体である彼の活動の軌跡は、そのような前提に立つとき、最もいきいきとしたアクチュアリティをもって私たちの前に現われるのではないだろうか。「芸術の自律」を保とうと腐心しながら、ネストロイ劇やオペレッタのような当時のポピュラー文化にも積極的に関与してその批判的な潜在力を発掘し、当時の知識人としては例外的な熱心さでメディア・リテラシー的な大衆啓蒙に努めた彼の歩みも、近代以降のテキスト中心主義的な「文学」観によっては回収されえない。むしろ彼の活動は、それにいち早く注目したベンヤミンからカルチュラル・スタディーズへ、そしてその影響を受けて成立し、ゲルマニスティークを含む精神科学のオルタナティブとして成長を遂げつつあるドイツの文化(諸)学へと至る批判的な思想群との関連をも視野に入れて捉え直すべき、多様なポテンシャルを蔵しているようにみえるのである。彼の先駆者ハイネと同じく、クラウスもまたジャンル横断的なアプローチを要求せずにはいないトリックスター的存在なのだ。本書の編者たちがここまでの展望をもっているかどうかは、現段階ではもちろん不明である。しかし続刊では、クラウスが「毒舌・罵倒語」を放った諷刺と論争の記録を通じてその具体的なコンテクストが、より浮き彫りにされるだろうし、また「イデオロギー」概念が、それにグラムシからアルチュセールに至る大衆文化論の系譜のなかで新しくこめられた含意とともにクラウスに適用されることが期待される。確かにドイツ語を母国語としない私たちにとって、本書の引用文は、長さが苦にならないとしてもその出典に関する情報があまりに乏しいし、語学的なハードルを越えるための手助けも十分に用意されているとはいえない。しかしこのことが強いる距離にもかかわらず、むしろそれゆえにこそ、この『辞典』を読むことは私たちにとって有意義な試みになるだろう。なぜなら、そのような距離はクラウス自身が「素材」に依存するこ

との断念として、また「母国語」に対して自覚すべき要件として読者に要求した距離と親和的な性質のものであろうし、国際的な共同作業から生まれた点でも、また反本質主義的な人種アイデンティティ理解と不可分な主題を内包している点でも、この書物は決してドイツの言語共同体の内部だけで流通するべく送り出された『辞典』ではあり得ないのだから。編者も述べているように、これを成立させたのはもともとクラウス自身がドイツ語の使用に対してもっていた情熱的で厳密な関心であるといえようが、それがどれほどナショナリスト的な自己了解から程遠いものであったかは、むしろ私たち外国人読者のような存在にこそ見えやすい問題かも知れないのである。そうだとすれば、私たちにはクラウス理解につきまってきたようにみえる地平の死角を埋める役割が与えられていると考えても、決して誤りにはならないだろう。同じく普遍性をめざした諷刺家でありながらも、エラスムスとはまた違う仕方でのような異文化間対話の展望をも拓かずにはいないクラウスという人物に親しみ、手軽に彼の原典を概観する方途として、本書を広く薦めたい所以である。